空

遥かに高く浮かぶ雲の下を
２機の旅客機が交叉する

熟したオレンジのような夕陽が、その半ばを
雲に沈める

電線を伝って、時が綱渡りをしている
それに沿って、僕は歩いて行く

自転車を上り坂で押して歩いてゆく、そのリズムを
あちこちに内蔵されている時計が密かに数えている

あればそれにこしたことはないが
なくてもかまわぬもの―――それは溢れている

この空が空であり続けたことを思い出す
ただ、背景となるものが増殖した、ということ

僕は何も見ていない
多くの謎が息を潜めている

塗りつぶされてゆく地上
塗りつぶされてゆく第二、第三の次元

僕は追うことを棄てた
思いきり遠く彼方を、そして上を見上げた

(2004.7.13)